

月待ち



皆さん、今年の中秋の名月は見ましたか？ 旧暦の8月15日である十五夜は、今年は9月14日(日)でした。14日は少し雲が多かったですね。

鎌倉時代末期に書かれた兼好法師の『徒然草』(239段)には、「八月十五日、九月十三日は、婁宿(ろうしゆく)なり。この宿、清明なる故に、月を玩(もてあそぶ)に良夜とす」とあり、月を愛でる風習が古くからあったことがうかがえます。

(※婁宿:天球における天の赤道を、不均等に28個に分割した「二十八宿」のうちの一つ)

月の満ち欠けから考えられた旧暦では、毎月15日が満月です。その中でも、特に8月の満月は美しいとされ、「十五夜」として人々は供え物などをしました。十五夜は、米の収穫祭としての性格を持ち、月見団子を作り、萩やススキなどを供える慣わしがあります。十五夜には、他家の供え物の団子や、畑の作物を盗っても許される、という風習が全国にあります。十五夜の月だけを見ることを「片見月」と言い、昔から嫌がられ、必ず旧暦9月13日の「十三夜」の月も見ました(今年は10月11日です)。

十五夜以外にも、かつて、人々が特別の想いを持って月を見ていたことをご存知でしょうか？ 江戸時代には、「月待(つきまち)」という、月の出を待つ慣習がありました。「月待講」という、特定の日にちの月の出を待つ集団もあり、その代表的なものに二十三夜講や二十六夜講がありました。現在では全くなされていませんが、明野町でも月待が行われていたようです。その証拠に、月待講が奉納した石造物が残されています。

まずは、シンプルに「月待」と書かれた月待塔(写真1)。文字で「月待」と書かれています。少し分かりづらいですが、文字の上には、日輪と月輪が彫られています。「月待」に対して、日の出を待つ「日待(ひまち)」という慣習も存在し、それらは常に対で考えられていたそうです。そのため、日輪と月輪があわせて彫られているものと思われます。

次は、二十二夜塔です(写真2)。こちらは、あわせて「二十三夜」とも書かれています。二十二夜待の本尊は、女性的な姿をした如意輪観音のため、二十二夜講には女人講が多く、その祈願内容も安産祈願が多かったそうです。

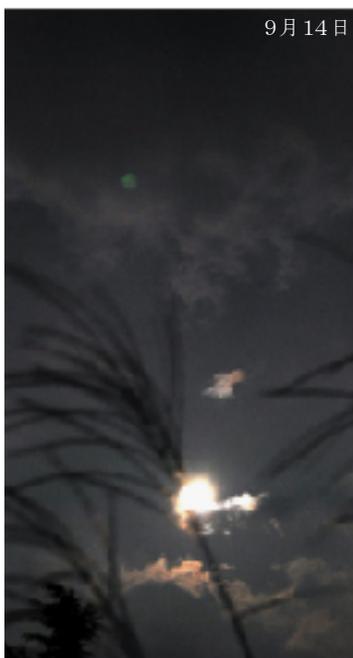
続いて二十三夜塔(写真3・4)ですが、こちらには勢至菩薩(せいしぼさつ)が彫られています。

勢至菩薩は、二十三夜待の本尊とされています。勢至菩薩の上にも、日輪と月輪が彫られています。江戸時代、江戸では月待が盛んに行われていたようですが、その実状は静かな民俗慣習ではなく、月の出を待っての宴だったようです。その江戸では、二十三夜待はあまり行われず、その代わりに二十六夜待が多く行われていました。

二十六夜の月は三日月のような細さで、尖った部分を下にして横向きに現れます。そのため、まず月の片方の先端、もう一方の先端、そして本体、と三度光が射し、そこから、弥陀三尊(阿弥陀、観音、勢至)の出現と崇められていました。明野町浅尾新田にある二十六夜塔(写真5・6)には、弥陀三尊の内の勢至菩薩が彫られています。

最後に七夜待塔(写真7・8)ですが、七夜とは、17日~23日にわたって六観音と勢至菩薩を祀ることです。七夜も月待をするのは大変なので、普通は七夜の内から一夜を選んだのではないかと考えられています。七夜待の最終日である二十三夜は、月待において重要と考えられていました。

現在より明かりが少なかった時代、人々は何を想って月の出を待ったのでしょうか？ 月は毎日姿を変化させていきます。夜、空を見上げてみてください。



9月14日



9月16日

撮影:会員 関間俊明氏

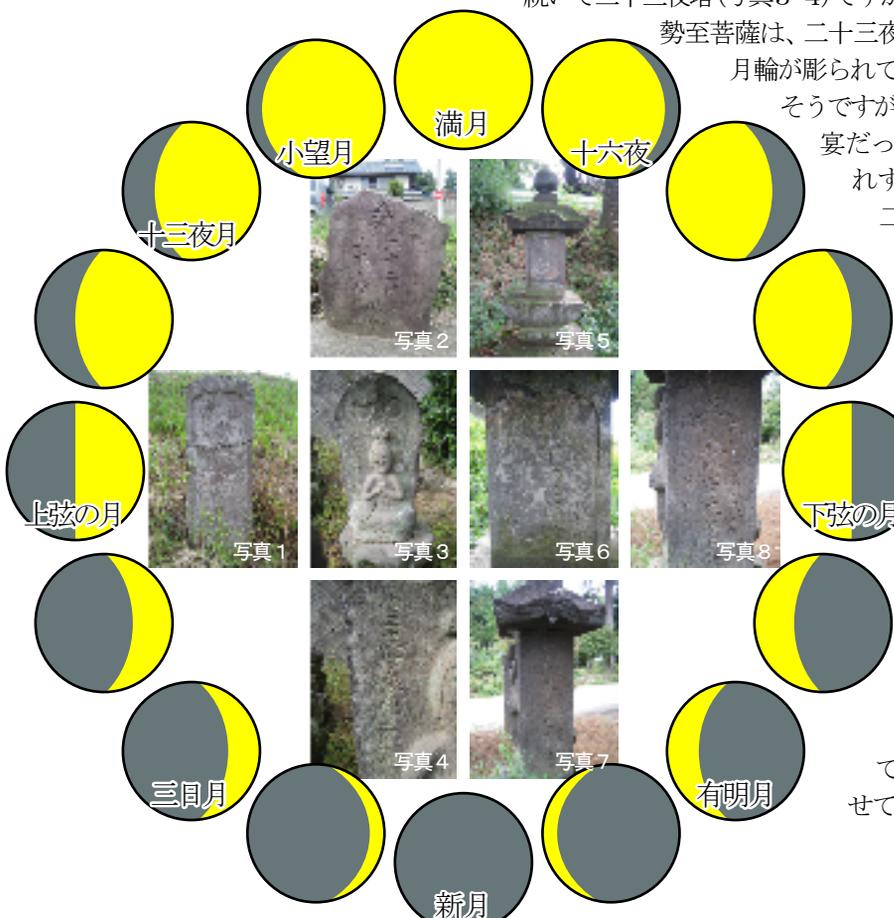


写真2



写真5



写真1



写真3



写真6



写真8



写真4



写真7